

古文書倶楽部

【発行】
秋田県公文書館
2010.1
第32号

当館閲覧室で、「公文書館所蔵資料に見る能代・山本」を開催中。享保十三年（一七二八）から昭和二十九年（一九五四）に至る「能代・山本」関連の絵図や公文書の一部を紹介します。どうぞ、お立ち寄りください。

宝永元年7月秋田上空に「光り物」の噂

岡本元朝は元禄十四年（一七〇一）から正徳二年（一七一一）にかけて秋田藩の家老を勤めた人物です。ここで紹介する記事は、岡本元朝が江戸藩邸詰の家老に就いている時の話です。

宝永元年（一七〇四）七月八日、老中秋元喬知の家来から秋田藩江戸藩邸の下山田新五郎が呼び出され、尋ねられます。

世間にて申唱候八、秋田にて去月廿二日・廿三日・廿四日二光り物飛候有候申候定説二候や殿中御沙汰二候由御尋二候

何と！六月二十二日〜二十四日にかけて秋田上空に光り物が飛んだという噂が江戸城内で広がっているというのです。今日風に言えば、未確認飛行物体ということでしょうか。

尋ねられた下山田もビックリしたでしょう、何も返答せず藩邸に戻ります。報告を受けた岡本元朝は早速、六月廿四日に秋田を発ち七日後に江

戸へ到着した飛脚に尋ねます。

飛脚は「道中水増候て漸昨晩着候へとも左様之儀不申」と答えます。また二十日頃秋田を発つてきたという藩士に同じことを尋ねますが、彼も「光り物は見えていません」と答えます。

岡本は、江戸城中でささやかれている噂なので、これは国元に尋ねて確かめなければならぬ、と日記に記しています。

七月十日、下山田新五郎が老中阿部正武邸を訪ねた際、再び同じことを聞かれました。下山田は「在所より不申来偽之由」と、つまり、国元では光り物が飛んだという話はないので、これは偽情報であると答えます。すると阿部家の用人「左様二可有之と八存候へ共、世間沙汰故申候」（ただの噂なのでしようけど、みんな話しているの聞いてみただけですよ）

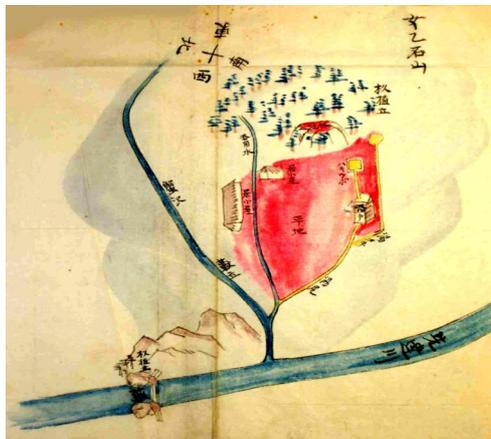
この後、岡本が幕府に対してどのような報告をしたのか？について、日記には何も記されていません。

秋田上空を飛んだ光り物の正体は何か？はたまた江戸城内で広まった根も葉もない噂なのか？興味のある方は『岡本元朝日記』二七（混架7 380 27）宝永元年七月八日条と十日条をご覧ください。なお『岡本元朝日記』は閲覧室に複製物があります。
(畑中康博)

明治十四年の温泉調査 第三回

蟹場温泉（現・秋田県仙北市田沢湖田沢字先達沢国育林）

寒い秋田の冬は、何と言っても温泉が一番！そこで本紙26号で取り上げた「衛生課司葉掛事務簿」（940108 00111）に記載のある温泉の内、蟹場温泉を紹介します。



温度
四十八度。
気泡を見ず。白色の沈積物、俗に湯の花と称するものあり。
発見
天保十三年（一八四二）

その地、蟹の多く住むを以て蟹湯と称す。

効能 痰・疝気・溜飲・脚氣・淋病・胸腹冷痛

温泉の効能は、「明治十四年段階で効き目がある」とされたものですので、**くれくれも御注意ください。**

古文書二ばればなし

天皇即位の祝賀使者

昨年(2019年)は天皇即位二十周年で十一月十二日に祝賀会が催されたことがニュースになりました。

江戸時代、天皇の即位式は十五回ありましたが、秋田藩では一門か重臣を祝賀の使者として京都へ派遣しました。ここでは、貞享四年(一六八七)四月二十八日に行われた東山天皇の即位式に、北家当主の佐竹義明と嫡子義命が参列した様子を「北家御日記」から見てみましょう。

佐竹義明・義命父子が角館を出発したのは貞享四年(一六八七)二月二十八日で、途中江戸で一ヶ月近くを過ごし、四月十七日、柳馬場通りにある秋田藩京都屋敷に到着しました。

佐竹義明の父義隣は高倉大納言家の出身で京都には親戚が多く、到着直後から挨拶廻りが始まります。それが済むと御所見物や芝居見物を行い、四月二十八日の即位式当日を待ちました。

しかし即位式前々日に江戸から藩主義処の六女弁姫の訃報が届き、当日は見物を中止し、家来を赴かせました。即位式を見るといつても御所門外に行くだけ。にもかかわらず混雑がすさまじく、人を見に行つたようなものと家来は報告しています。面白いのは次の報告。

御庭の奉行には土屋相模殿(京都所司代)成られ候。それに就いて相州の御家来分に成り候へば、心安く拝見申候由也。

古文書倶楽部 第32号 (2010年1月) つまり、自分たちが京都所司代の家来であれば、一般見物人とは異なる場所へ行けるのに...と報

告していることです。もしかすると、土屋家へ内々にお金を払い、家来分という形で即位式を特等席で見ることができたのかもしれない。

即位式が終わると、各大名が御所へ献上品を納めるべく参内します。まず五月一日に保科・尾張・紀伊・水戸・甲府といった徳川家一門の使者が参内します。そして五月三日に佐竹義明が参内します。御所内での献納は大名の家格順で、前田・島津・松平(高松藩)・水戸徳川家の連枝・伊達・井伊から始まり、佐竹義明は十七、八番目でした。義明は中将・少将・侍従の大名の使者が着用する布衣・冠・緒太の草履の姿で参内しました。

これが終わると、翌日からは大臣・公家関係へ進物を献上します。全ての公務を終えると京都や大坂を見物し五月二十八日に帰途につきます。帰路は中山道・北陸道を経由し六月十九日に角館へ到着しました。

公務を兼ねた遊山のような旅でしたが、日記には沢山のおみやげ品が書かれています。(おみやげリストはAK212 353にあり)

隠居の佐竹義隣へは畝晒帷子。義明の母へは帯・筆・折紙。義明の妹へは文箱。義明の娘へは帷子・きれ・琴の爪。妾や女中へは帯や皮足袋。身分の低い女中へは扇子を配っています。

家来へは肩絹・帯・茶入れ・扇子の類。小姓へは麻袴、鼻紙袋を配っています。これらおみやげ品の総数は二百十一で、身内や家来を中心に配っていることが分かります。(嵯峨稔雄)

花押クイズ 第2問 誰のサインでしょう

花押とは、文書の最後に発給者が記すサインです。前号「古文書倶楽部」に引き続き、今回も「花押藪」(A二八〇 七一)から出題します。すべて甲信越の戦国武将です。さて次の花押を書いた人は誰でしょう。



第一問 領国を甲斐から信濃・駿河に拡大。三河侵攻時に病死した人物です。



第二問 第一問の人物の花押とよく似ています。そこから親身が兄弟に当たる人物を思い浮かべてみてください。



第三問 第一問の人物と、川中島で合戦を繰り広げた人物です。前号 第四問の花押と比べてみてください。

答は次号「古文書倶楽部」で。次号まで待ちきれない方は、「花押藪」をご覧ください。